

解することに對し、ロイリットの“Original texts”とする見解の方を數種のケースに照らし正しものであると立證した點などはみるべきところである。phyi-maの第二形である、phyi-moは各版目録にみられるが、ケースにより「原典」・「底本」・「精要」と譯すべきで、河口師前掲目録にては「外編」と譯され、ツッチも「補編」と理解してゐるが、“original or essential texts”の意味で、經典成立史の資料を扱う場合、phyi-mo, 及び phyi-mo'i-phyi-moは注意すべき語である。

最後に、チャンドラ氏が、Rinchenの所説として、一九三七年同版丹珠爾が校了となり、若干帙が開雕出版をれたと明らかにしていることを附記しておく。

## 註

- (1) 酒井氏は密教研究第七六號・第八七號において、山西省五台山黃廟鎮海寺並びに普壽寺所藏庫倫版甘珠爾の調査成果を發表しているが、同氏は時輪經疏部帙番號、Stの重複を一帙とし、目錄部ともて計一〇四帙と記してゐる。
- (2) 銀衡單位は、10 skar-ma=1 Zo. 10; Zo=1 Srañ, 50 Srañ=1 rTa-mig, 1 rTa-mig は1馬蹄大銀塊にあたる。
- (3) Alexander Csoma Körösi; Analysis of the Dulva, a portion of the Tibetan work entitled the Kah-gyur.

—Analysis of the Sher-chin, P'hal-ch'en, Dkon-séks, Do-dé, Nyang-dás, and Gytur; being the 2nd, 3rd, 4th, 5th, 6th, and 7th divisions of the Tibetan work, entitled the Kah-gyur.——Abstract of the contents of the Bstan-hgyur. Asiatic Researches, Vol. 20, 1836, 1839, pp. 41~63, 363~552, 553~585.

- (4) Bkañ-hgyur-gyi dkar-chag oder der Index des Kan-djur. Herausgegeben von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften und beantwortet von I. J. Schmidt, St. Petersburg, 1845.

- (5) H. Beckh, Verzeichnis der tibetischen Handschriften der Königlichen Bibliothek zu Berlin. Erste Abteilung: Kanjur (Bkañ-hgyur). Berlin, 1914.

(國立國會圖書館支那東洋文庫員)

J・ダンカン・M・デレット

「ホイサラ家——中世インディヤ王家」

辛 島 昇

J. Duncan M. Derrett, M. A. (Oxfrd), Ph. D. (Lond.): The Hoysalas, A Mediaeval Indian Royal Family. Madras, Oxford University Press, 1957.

xx+257 p., 6 maps, 5 pls. 22×14 cm.

表題の「ホイサラ家」とは、「中世インド王家<sup>(1)</sup>」という副題にあきらかなように、一一世紀から一四世紀にかけて、南インドのカルナータカ地方を支配したインド（ヒンドゥー）の王家である。

著者 J. D. M. Derrett 氏は、現在ロンドン大学の準教授 (Reader) として、同大学東洋アフリカ研究学校法科において、ヒンドゥー法を講じている英國の法學者である。ヒンドゥー法の研究者として、著者は、インドの歴史についても非常に深い造詣をもっている。<sup>(2)</sup> 本書は、その著者がかつて學位論文の一部としてロンドン大学に提出した南インド、特にカルナータカ地方の碑文に關する論考をもとしながら、その時とは問題の視點を改めて、新たに筆をとつたものである。

本書の結構と内容を簡単に示せば、次の如くである。

## 序文

vi~xi

本書の目的は、一中世ヒンドゥー國家の王達のなした事績に鳥瞰を與えるところにあること、ほか。

## 追記

xi~xii

本書の出版が、予測せざる事情により遅れたこと (序文

J・ダンカン・M・デレット「ホイサラ家——中世インド王家」

の日附は一九五三年五月であり、實際に書かれたのは一九五〇年から一九五二年にかけての頃と思われる。著者は、一九五二年には南インドにおもむいている。

## 第一章・序 章

1~15

中世ヒンドゥー王家の一好例としてホイサラ家を取り上げることの意味。搖籃期のホイサラ朝とその環境。

## 第二章・ホイサラ朝の興起

16~37

山間部族であつたホイサラ家が平地に進出し勢力を築き、チャールキヤ朝の封臣となる過程。

第三章・皇帝の地位を得ようとする最初の試みとその失敗

38~79

Ballala I から Visnuvardhana の時代にかけて勢力が増大すること。その結果としての、チャールキヤ朝にとつて代ろうとする試みが Visnuvardhana の死と共に挫折して行く過程。

第四章・皇帝の地位を得ようとする二回目の試みとその成功。そして常軌逸脱。

80~116

Ballala II の治世に時節到來し、遂にチャールキヤ朝を倒しカルナータカ地方の覇權を獲得するが、その晩年から Narasimha II の時代にかけて、タミル地方に侵出して行く事情。

辛島

第四卷 三六七

## 第五章・衰退

117~142

續く、*Somsvara* の時代に、タミル地方への侵出の結果として、王國の南北に困難な事態が生じ、遂に王國が二王子の間に分割され、その両者が反目し内戦に發展する過程。

## 第六章・崩壊

143~174

*Ballala III* の時代に再び統一されるが、その時 *Malik Kafur* の侵入を見ること。その後 *Ballala III* の活躍が續くが、再びタミル地方に侵出し、その結果、ヴィジャナガル王國とマドゥラのムスリム勢力に挾撃され、彼の戦死と共に王國の崩壊する状態。

## 第七章・ホイサラ國の行政

175~203

以上のような政治史の動きを可能ならしめたものとしての行政制度に關する概説。王・官制・税制など。

## アペンディクシズ

## 一、ホイサラ家系圖

204~205

## 二、研究史料解説

206~218

## 註

219~235

## 書目

236~243

## 索引

245~257

これによつてもわかるように、本書は、一應ホイサラ朝の概説書としての體裁をとつて書かれている。そして著者は、具體的には、ホイサラ家の人々とはどのような人々であり、彼らはどこから起り、何故に亡び去つたか、というような問題を設定しながら (p. vii)、ホイサラ朝の興起から滅亡に至る間の王達の事績に鳥瞰を與えているのである。しかし、前に記した「序文」によつても明らかのように、著者が本書で目的としているところは、單なるホイサラ朝の王達の事績の鳥瞰ではなく、一、中世ヒンドゥー王家としてのホイサラ家の王達の事績の鳥瞰なのである。すなわち、目的はあくまで中世ヒンドゥー國家の王の事績の鳥瞰なのであつて、ホイサラ家はそのためのいわば材料としてとり上げられているともいえる。そして、そのような著者の目的の背後には、その王の事績の鳥瞰を通して、中世インドの國家、特にその王權が實際にはどのようなものであつたか、またそれは西歐のそれと對比して、どのような特色をもっているかという點を明らかにしようとする意圖が存在しているのである (pp. vii, 1, 3, 177)。このような意圖の存在こそは、本書をして通常の概説書と異ならしめる特色であり、その結果としての著者の見解は、強く興味をそそるものがある。そしてその著者の見解は (まとめつてはつきりした形で述べられているのではないが、

處々に散見するものとまとめると)、中世インドの王國は、王家の a joint-family asset であり (P. 178.)、その manager としての王 (pp. 178, 193.) 個人の果たす役割がきわめて大きく、そのために王の個人的資質が、大きく社會の發展に影響を及ぼすことになる (pp. 68, 69, 143, 175, 177, 191.) というのである。すなわち、中世インド (ヒンドゥー) の王權が、個人的、專制的なものとして捉えられているのである。

さて、このような中世インドの王權に關する著者の認識について、第一に問題になる點は、通常說かれるところでは、中世インドにおける王權は、著者のいう如く個人的・專制的なものではなく、いろいろの立場からの制約を受けており、從つて著者の見解は通説に反するということである。しかし著者はこの問題に對して、通常とは異つたアプローチのしかたをとつているのである。すなわち、王權の問題は通常、種々のシャーストラ類や、宮廷で書かれた著作などによつて考察されているのであるが、著者は、それらをしりぞけて、當時の碑文を通して知られる史實から、王權の實態(理論でなく)を描き出そうと試みていのである (pp. 2, 3.)。したがつてこの方法の相違が、通説との見解の相違をもたらしたといえる。そこで、問題となるのは、そのアプローチの仕方である。ホイサラ朝に限つていうならば、著者の説くところに

は、或程度の説得性がある。しかし、史料としての碑文は、一面において大きな信憑性をもつと同時に、他面においては極めて制約された性格をもつていから、著者のこのようなアプローチの仕方は、なお後に考究されるべき點をもつとも思われる。この紹介文の筆者自身は遺憾ながらいまだそれを批判する資質を具えていないが、この問題は重要な問題であり、廣く論議の起ることを期待したいと思う。また、著者の説くところが、ホイサラ朝に止まらず、中世インド、或いは中世南インド一般にまで押し進めていいうるかどうかについては別な問題で、今後さらに十分に考究されなければならないであらう。

今一つ問題として残される點は、王家と王との關係、あるいは王家そのものの實態について、本書が餘り問題にしていない點であると思う。著者はもちろん前記したように、それに對して joint-family の manager としての王という考えを打ち出しているが、それ以上の具體的記述に缺けている。これは主に史料の不足にもとづくもので、著者が批判されるべき問題ではないが、興味深い重要な問題だけに、博識の著者が他日何らかの形で考究し發表されることを切に希望したい。なおそれと關聯して著者が、王國は王家の a joint-family asset であるとした點と、さらに王は土地の唯一の所有者

(owner) であるとした點 (p. 193) については、すでに K. A. Nilakanta Sastri 氏の反論が出されていることを指摘しておきたい。<sup>(5)</sup>

以上要するに、本書は、著者の問題意圖と、それへのアプローチの仕方とで、極めて注目に値するものであり、今後の研究に多くの問題を投げかけるものといわなければならない。その意味で、著者の見解の正否は別として、近年におけるインド史に關する重要な勞作の一つである。又、ホイサラ朝の概説書として本書を考えた場合、以上のような著者の意圖から、本書では論旨を通すところに主眼がおかれ、そのために、概説書としては、個々の事實の史料の説明に幾分かけた憾みがある。しかしながらその記述は、K. A. Nilakanta Sastri 氏によつても、二三の點を除いて正論であることが認められている。<sup>(6)</sup> さらに、註は、少量ながらかなり詳細であり、巻末の書目は、史料と研究書についての極めて完備したもので、史料解説とあわせて、本文の缺を十分に補っているといつてよい。

従來、ホイサラ朝はインド史上重要な王朝の一つでありながら、それについての満足すべき概説書が存在せず、一般研究者の間では、信頼すべき概説書の出現に對する期待が大きかつた。筆者は、その期待にも答へ得る本書の出現を、心か

ら喜ぶものである。

# 註

(1) 著者のいう「中世インド」とは次の如き時代を意味している。即ち

“after the age of the continental empires and the Śaka and Huna invasions but before the intrusion of Muslim dynasties had produced the characteristic distractions in Hindu society” (p. vii)

(2) 他の著作については、Hindu Law Past and Present. Calcutta, 1957. がある。

更に、BSOAS には著者の論考が多く掲載されているが、そのうち次の二篇は本書 (The Hoysalas) に關聯してその補遺、訂正の意味で書かれたものである。即ち、

Bhū-bharaṇa, bhū-pālana, bhū-bhojana: An Indian conundrum. BSOAS, vol. xxii, pt. 1, pp. 108-23, 1959.  
Sōmēśvara and the Kādava; Cincilla: three corrections. BSOAS, vol. xxii, pt. 2, pp. 356-8, 1959.

(3) 同、p. 177. の記述は、かなり控へ目であり、多少矛盾적でもある。しかし、全體としての著者の態度は、あくまで個人的、專制的な面を強調するところにある。

(4) U. N. Ghoshal: A History of Hindu Political Theories. 2nd ed., Oxford, 1927.

A. S. Altekar: *State and Government in Ancient India*. 3rd ed., Banaras, 1958, chs. v, xvi.

T. V. Mahalingam: *South Indian Polity*. Madras, 1955, ch. ii.

K. A. Nilakanta Sastri: *A History of South India*. 2nd ed., Madras, 1958, pp. 157~62. 参照。

- (5) K. A. Nilakanta Sastri 氏の本書の書評。 *Journal of Indian History*, vol. xxxv, pt. ii, pp. 279~83, (1957). この Nilakanta Sastri 氏が問題にした「王の後者」即ち王の土地所有の問題については Derrett 氏は前掲の BSOAS, vol. xxii, pt. 1 の論考で、再びそれを論じている。 Derrett 氏は、それを直接には「ホイサラ」或いは「専制」等の問題とは関係させていないが、この問題は國家構造の基盤の問題として、今後の古代・中世インドの研究に影響をもつ重要な問題である。

- (6) 前掲の書評。

- (7) 再びホイサラ朝の概説書として、William Coelho: *The Hoysaja Vanša*. Bombay, 1950. やや古いものもある。しかし遺憾ながらこの書は、良書とはいえない難いものである。(K. A. Nilakanta Sastri 氏の書評 *Journal of Indian History*, vol. xxx, pt. iii, pp. 314~6, (1952). 参照)。

また、Derrett 氏は本書の「序文」において、ホイサラ朝に

J・ダンカン・M・デレット「ホイサラ家——中世インド王家」

關しては、マドラス大學やマイソール大學でなされた研究に未發表のものな二三あるこのことを述べている。それとの關係はないが、最近發表されたものとしては R. C. Majumdar (ed.): *The History and Culture of the Indian People*, vol. v, Bombay, 1957, ch. ix. *The Hoysalas*, by the late Dewan Bahadur S. Krishnaswami Aiyangar and R. C. Majumdar (pp. 226~33) がある。なぜ Nilakanta Sastri 氏の書評では、Derrett 氏の著書が(概説書として)従來の見解を改める點は別にもつていない旨記されているが、この Krishnaswami Aiyangar 氏のもの(極めて短かな)と Derrett 氏のものとの間にも特に問題となるような相異は存在していない。

(東京大學大学院人文科學研究科學生)